財団法人 中東調査会
The Middle East Research Institute of Japan
المعهد الياباني لبحوث الشرق الأوسط

かわら版

2007年6月11日
No.132

―東地中海地域ニュース―

パレスチナ：占領40周年のアッバースPA大統領のスピーチ　（6月6日付現地各紙）

1．1967年から現在まで：

1967 年戦争（注：第三次中東戦争）での敗北は、1948 年（注：イスラエル建国）から始まったナクバ（災難）に新たな側面を与える事になったが、同時に特にパレスチナ人民に大きな闘争の任務を与える事になった。パレスチナ人民は、かかる困難に立ち向かい、勇気と忍耐をもってその負担を担い、国家的な革命運動のパフォーマンスと効果を発展させることを通じて、大敗北に対応してきた。我々は、67 年戦争の敗北を克服し、あらゆる困難にも拘わらず、間近となった独立国家の樹立に向けて歩みを進めている。現在の大きな困難は、独立国家樹立に向けた陣痛なのかも知れない。

2．レバノンの難民キャンプ情勢について：

パレスチナの闘争とは関係のない過激派グループが、レバノン軍を攻撃するために難民キャンプを利用し、無辜のパレスチナ人民を危険に晒している。我々は、レバノンの同胞の生命に大きな懸念を表明する。レバノン政府が、彼らの生命と利益を守ろうとしている事を確信しつつ、かかる武装組織を非難する。

3．パレスチナ内政について：

(1) 治安情勢

治安情勢の悪化、正確に言えば、内戦の瀬戸際にある事を皆が心配している。無責任な口論が流血の事態を招き、更には、国際社会におけるパレスチナ問題の地位の低下を招いた。第二回目の衝突（注：5 月の衝突）は、メッカ合意と挙国一致内閣の組閣後に発生した事から極めて危険であった。パレスチナ内部の停戦を強化すると共に、自分は、イスラエルとの停戦に努めている。停戦は、ガザと西岸で包括的且つ同時的でなければならない。同時に自分は、危機の現場に身を置く事によって、停戦や内紛の決定が一部の個人やグループの手に留まらないように努力している。自分は、第一にパレスチナ市民の安全の為、第二にパレスチナ問題を前進させるのに適当な環境醸成に努力し続ける。

(2) 国際社会による封鎖

自分自身、貴方方と共に封鎖の中で生活し、それに苦しんでいる。封鎖の終結或いは緩和に向けて、日夜努力している。封鎖は経済、政治面のみならず、社会的問題や人材の流出、PA 機関の活動停止などの問題を起こしている。特に PLC 議員の逮捕や活動停止は痛ましい。PLC 議員、閣僚、地方公共団体の長などの無条件釈放を求め続ける。

(3) パレスチナ人民への呼び掛け

辛抱し、立ち向かおうではないか。あらゆる困難にも拘わらず、我々には未だ希望がある。国際社会は、地域と国際的安定の基礎として、パレスチナ国家の誕生が必須であるとに合意している。これは軽視すべき事柄ではない。又、国際社会は、我々への支援を発展させる事を検討している。こうした支援が提供されるに相応しい環境整備の責任の多くを、我々は、その立場と振る舞いの面で負っているのである。

4．オルメルト・イスラエル首相との会談について：

数日後に自分は、オルメルト首相と PA 領内で会う予定である。自分は、分離バリアの弊害を提示し、自分のみならず国際社会がバリアを拒絶している事を再度明らかにする。又、入植地の問題も強く提起する。囚人問題もしかりである。我々の凍結された資金の問題も提起する。更に、暴力の連鎖に留まり続けないよう交渉トラックを開く必要性も強調する。何故ならば、軍事行動に対して政治的努力が欠けている状態は、当事者がどのような意思決定も行えず、物事を複雑化させるだけだからである。

◎本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。
ご質問・お問合せ先　財団法人中東調査会　TEL:03-3371-5798、FAX:03-3371-5799